

肺悪性リンパ腫の1切除例

都留市立病院 外科 深澤敏男 大原毅 川島健司
山梨大学医学部 人体病理学 山根徹

要旨：症例は77歳男性。胸部異常陰影にて受診した。画像上右中葉に約6cmの腫瘤影を認めた。精査の後、外来にて約2年間の経過観察を行い、大きさに変化を認めなかったが、消失しないため、右肺中葉切除術を施行した。病理学的にB細胞悪性リンパ腫で、MALTリンパ腫と思われた。術後経過観察中であるが、2年経過後の現在も異常所見を認めない。

キーワード：肺悪性リンパ腫、MALTリンパ腫、手術、低悪性度

はじめに

肺原発悪性リンパ腫は悪性リンパ腫全体の0.4～1.0%で、肺悪性腫瘍全体の0.45%と、まれな疾患である¹⁾²⁾。また、その大部分は低悪性度のMALTリンパ腫で、予後良好な疾患といわれている³⁾⁴⁾。今回、長期経過観察後に切除した症例を経験した。

症例

77歳男性。平成16年7月、右下肺野の異常陰影にて近医より当院内科に紹介となった。既往歴は、昭和63年より狭心症、心房細動、高血圧にて内服通院中。その際慢性B型肝炎を指摘され経過観察している。来院時の明らかな理学的所見、自覚症状は認められなかった。

初診時の胸部X線写真(Fig.1)では右下肺野、横隔膜上に淡い陰影を認めた。CT所見では右S5に直径約6cmの不整形陰影で、陰影の周囲に炎症を思わせる淡い陰影を認めた。気管支鏡検査ではBlushingにてClass IIであった。血液データ、腫瘍マーカーともに異常所見はなく、厳重管理の

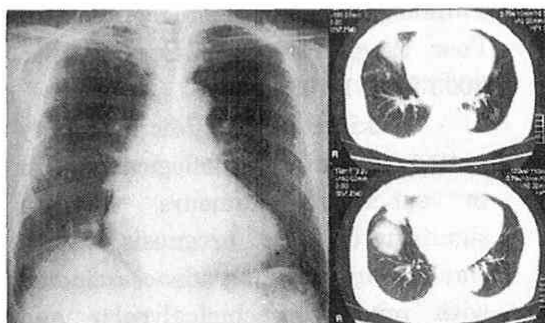


Fig.1 X-ray finding of 2004.7.

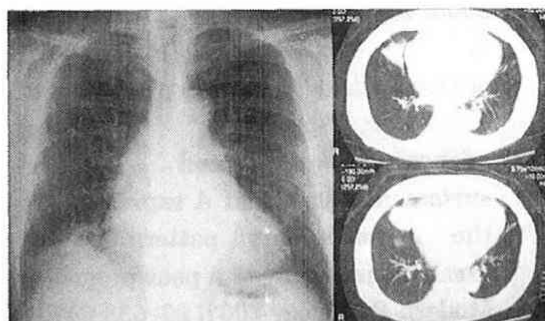


Fig.2 X-ray finding of 2006.11.

上、外来経過観察とした。2年間経過観察の後、平成18年6月、精査のため外科に紹介された。画像所見は、胸部単純写真ではやや増大しているように思われたが、CTスキャンでは特に大きな変化はなかった。(Fig.2)血液検査、肺癌腫瘍マーカー、可溶性IL-2レセプター、喀痰検査、骨髄

検査(骨髄像、細胞診)では明らかな異常所見を認めなかった。気管支鏡下 Blushing による細胞診にて小型でクロマチン増量・濃染した裸核状の細胞を認め、Class IIIであった。また、HBs 抗原、HBc 抗体、HBe 抗体が陽性であった。確定診断はついていないものの、悪性腫瘍の可能性もあるため、患者さんと相談の上、平成 18 年 12 月 14 日、胸腔鏡補助下右肺中葉切除術を施行した。

組織学的検索では、リンパ球様異型細胞が充実性に増殖し、小葉間隔壁や血管、気管支周囲のリンパ路に浸潤性に monotonous に増殖していた(Fig.3)。また、気管支内への腫瘍浸潤が見られた。CD20 免疫染色では陽性を示し(Fig.4)、CD3,CD5 は陰性だった。以上より B 細胞悪性リンパ腫で、BALT より発生した MALT リンパ腫と思われた。

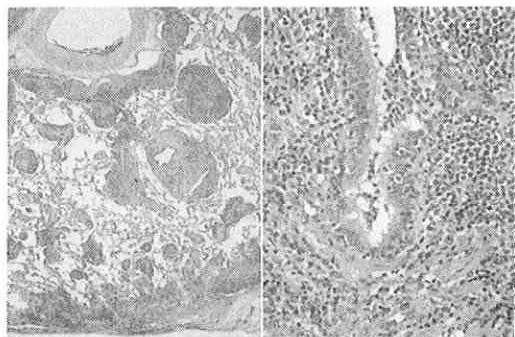


Fig.3 Pathology(H-E)

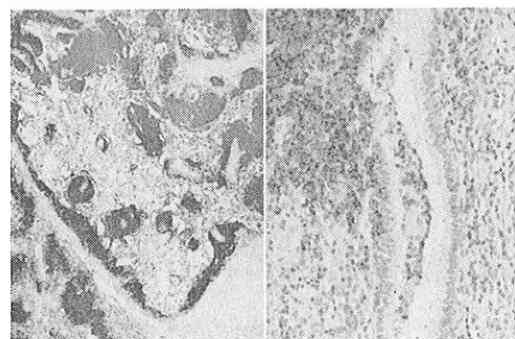


Fig.4 Pathology(CD20)

術後経過は良好で、化学療法の追加も考えたが、低悪性度の疾患で、術後の PET-CT でも明らかな異常所見はなく、完全切除ができており、また、リツキサンのその他の化学療法剤による化学療法を施行した場合、B 型肝炎キャリアーであるため肝炎発病や重症化の危険性もあり、外来経過観察とした。2 年経過後の現在、画像上、左下葉にわずかに炎症性変化を認めるものの、明らかな再発の兆候もなく、通院中である。

考察

肺 MALT リンパ腫は悪性度が低く、発育も非常に緩徐なため、予後の非常に良い疾患と言われている³⁾⁴⁾。術前に診断され、切除された症例も報告されている⁵⁾が、一般に術前診断は困難と言われている⁶⁾⁷⁾⁸⁾。また、画像所見も多彩な所見を示す¹⁾²⁾ため、画像診断のみに頼ることも危険で、多くのデータをもとに診断していく必要がある。本症例は気管支鏡検査で悪性リンパ腫の可能性が示唆されたが、最終診断は摘出標本の結果を待つこととなった。低悪性度の MALT リンパ腫で、完全切除であったため、経過良好であった 1 例である。

引用文献

- 1) 福島 文、芦澤和人、長置健司、他. 肺の悪性リンパ腫. 画像診断 2001;21:389 - 397.
- 2) 藤本公則、佐土原順子、寺崎 洋、他. 悪性リンパ腫の画像診断:鑑別診断を中心に 肺. 臨床画像 2002;18:746 - 760.

- 3) 白杵憲祐、浦部晶夫. 肺リンパ腫の治療. 日胸 2007;66:198-209.
- 4) 稲垣 宏、岡部光邦. 肺のリンパ腫. 血液・腫瘍科 2004;49:665-671.
- 5) 相川広一、斎藤泰紀、平野春人、他. 術前に肺原発 MALT リンパ腫を診断しえた 2 切除例. 気管支学 1996;18:717-722.
- 6) 藤崎成至、新原 亮、向井勝紀、他. 原発性肺癌と鑑別が困難であった肺原発 MALT リンパ腫の 1 例. 日臨外会誌 2006;67:2346-2350.
- 7) 山下眞一、吉田直矢、猪鹿俊彦、他. 長期経過後に手術を施行した肺 MALT リンパ腫の 1 例. 日呼外会誌 2008;22:672-676.
- 8) 永島 明、下川秀彦、竹之山光広. 肺原発 MALT リンパ腫切除例の検討. 日臨外会誌 2004;65:3157-3160.